2020年横浜ナザレン教会受難節第四主日礼拝
「皆おなじ」ルカ福音書13:1～9

【聖書テキスト】

ルカによる福音書 13:1 ちょうどそのとき、何人かの人が来て、ピラトがガリラヤ
人の血を彼らのいけにえに混ぜたことをイエスに告げた。2 イエスはお答え
になった。「そのガリラヤ人たちがそのような災難に遭ったのは、ほかのどの
ガリラヤ人よりも罪深い者だったからだと思うのか。3 決してそうではない。言
っておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。4 また、
シロアムの塔が倒れて死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいたほか
のどの人々よりも、罪深い者だったと思うのか。5 決してそうではない。言っ
ておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。」
6 そして、イエスは次のたとえを話された。「ある人がぶどう園にいちじくの木
を植えておき、実を探しに来たが見つからなかった。7 そこで、園丁に言っ
た。『もう三年もの間、このいちじくの木に実を探しに来ているのに、見つけ
たためしがない。だから切り倒せ。なぜ、土地をふさがせておくのか。』8 園
丁は答えた。『御主人様、今年もこのままにしておいてください。木の周りを
掘って、肥やしをやってみます。9 そうすれば、来年は実がなるかもしれませ
ん。もしそれでもだめなら、切り倒してください。』」

1　イギリスでのこと

新型コロナウイルスの感染が拡大していった先月の二十日前後から、ネットのコロナウィルス関連のニュースを追うようになりました。ちょうど10日前 3/12にイギリスで生活するフリーライターのブレイディみかこさんの書いた「真の危機はウィルスではなく恐れ」という記事を見ました。少し長いのですが、引用します。

「英国の公立中学校に通っている息子がこんなことを言っていた。“今日、教室を移動していたら、階段ですれ違いざまに同級生の男子から『学校にコロナを広めるな』って言われた。”これはまたストレート過ぎる言葉だなと驚いた。息子もさすがに引いたらしい。『あまりにひどいから、絶句してしばらくその場に立っていた。なんだか、もはやアジア人そのものがコロナウイルスになったみたいだね』」

このあと、フレディみかこさんは、フランス・ドイツ、イギリスなどの、日頃であれば政治的公正に対して敏感であり差別的な文言に慎重な媒体までもがあからさまに、コロナウィルスに苦しむアジア人を揶揄するような報道をする事を具体的に述べ、「いったい、どうしたことだろう。社会のこうしたムードが子どもに影響を与えないわけがない。」と嘆きます。そして EU 諸国のこのような報道は、「差別の構造を語るとき、『無知』を『恐れ』で焚（た）きつければ『ヘイト』が抽

出されるとよく言われるが、ウイルス感染拡大のニュースが絶え間なく流れている今、まさに『無知』を焚きつける『恐れ』はそこら中にあふれている。」「世界を真の危機に陥れるのは新型ウイルスではなく、それに対する『恐れ』のほうだろう。日本でもトイレットペーパーの買いだめが起こったそうだが、パニック買いは英国でも始まっている。」「人は、未知なものには弱い。新型ウイルス感染が収束する時期もわからなければ、感染している人も見分けられない。だから不安になる。『未知』と『無知』がイコールで結ばれるとき、それに『恐れ』の火を焚きつけられたら、抽出されるものはまったく同じものなのだろうか。」とします。(3/12 配信　デジタル朝日新聞配信)

「無知に恐れの火を焚きつけるとそこに抽出されるのは、ヘイト(憎しみ)である」とはまさにその通りだと思います。九年前の東日本震災の際も、そして今回のコロナウイルス騒動の際も、いわれのない差別発言や差別行動が続きます。遠く関東大震災の時には、デマによってパニックに陥った人々による朝鮮人虐殺が起こっていますし、今回も埼玉県庁の役人が、県内の教育機関にマスクを配る際に朝鮮人幼稚園にだけマスクを配らなかった…という事件も取りざたされています。後に謝罪し配ったようですが、公僕と言われる人々が命に国籍で差別するとは…と心が暗くなりました。

主イエスは今日の聖書テキストでおっしゃいます。「皆、おなじだ」と。聖書は実に今日的、現代的なテキストだと思います。いえ、逆でした。現代世界を良心的に支える人権意識の基盤は、聖書の福音、イエス・キリストその方にあります。「**あなたがたも悔い改めなければ、みなおなじように滅びる**」という主イエスの言葉は、新型コロナウィルスで混乱する世に生きる私たちにどのように語りかけているのか、ご一緒に聞いていきたいと思います。

2　ピラトの蛮行

主イエスは、群衆に向けて、訴える人と仲直りすることの譬えを話しておられました。その譬えは、「神の最終的な裁きが下る前に神さまと和解しなさい」という勧めでした。ちょうどその時です、よそから何人かの人が主イエスのもとに来て、衝撃的なニュースを伝えます。ローマ帝国の植民地であったシリア・サマリア・ユダヤ・イドマヤ州の総督であるポンティオ・ピラトが、エルサレム神殿で犠牲をささげ礼拝していたガリラヤ人達を惨殺したというのです。実は、この事件、書き残されているのは、ルカ福音書だけです。聖書にも、聖書以外の歴史書にも見当たりません。しかし、ピラトの他の悪事は、ヨセフスという歴史家がいくつか書き残しています。例えば、ここと同じようにゲリジム山で礼拝しているサマリヤ人達を虐殺したとか、エルサレム神殿にローマ皇帝の像を持ち込み、暴動が起こったとか、神殿の宝物庫の金品を勝手に使ったために抵

抗運動が起きた…などなど。ピラトが支配下の植民地の民を弾圧する事は、決して珍しくなかったようです。

3　ガリラヤ地方

　また、ピラトが虐殺したのがガリラヤ人であった、というのも意味あることだと思います。地図を見て頂ければわかりますが、ガリラヤ地方は、イスラエルの北の端。
北のシリアや、ガリラヤ湖の東側にあるギリシャ都市国家群デカポリスとの交流が盛んな地方で、ユダヤ人以外、いわゆる異邦人が多く住んでいる地方でした。イザヤ書8章には、「**異邦人の地ガリラヤ**」と言う言葉が出てきます。ですから、当時のエルサレムに陣取るユダヤ教の権威者やエルサレム住民から、ガリラヤ地方は宗教的には不純な場所、格段に劣った地方だと軽蔑されていました。しかし、神のなさる事は不思議です。ユダヤ教の権威者達から差別されていたからでしょうか、却って、非常に熱心な信仰が育まれていたようです。そして、常にローマ帝国の脅威を感じる位置にあったせいか、反ローマ帝国の運動も盛んでした。ガリラヤ地方では、ローマ帝国に対する反乱が繰り返し起こっていたと言われています。このために、ピラトもガリラヤ人達の動きには神経質になり、礼拝中に虐殺したのかもしれません。ガリラヤ地方は、宗教的にも政治的にも緊張した地方でした。ピラトのガリラヤ人虐殺事件は、このような緊張を背景に起こったものでしたから、それを伝える人々の心もまた動揺していたことでしょう。人々は、主イエスがこのニュースを聞いた時、どのように反応することを期待していたのでしょうか。群衆の中には、エルサレムに向かわれる主イエスがピラトの残虐行為に腹を立て、ここで反ローマ帝国の狼煙を上げることを期待した人々もいたかもしれません。

4　因果応報思想

　また中には、違うふうに考える人もいたでしょう、「こんな酷い目にあうのは、やはりガリラヤ人が信仰的に不純な人々だからだし、その中でも殺された人々は特に罪深かったのだろう」という考えです。ちょっと聞くと、古代人の迷信のように思うこの考え方、実は、現代人の私たちにもある傾向です。日本でも浪花節に「親の因果が子に報い」とあるように、理由が分からない病気や災難、災害などを、人類は、誰かの罪のせいにするのです。そのような人々の心を見抜いておられる主イエスは問いかけます。「**そのガリラヤ人たちがそのような災難に遭ったのは、ほかのどのガリラヤ人よりも罪深い者だったからだと思うのか。**」

更に主の問いかけは続けます。「**また、シロアムの塔が倒れて死んだあの十八人は、エルサレムに住んでいたほかのどの人々よりも、罪深い者だったと思うのか。**」ここに出てくるシロアムというのは、エルサレムの南にある池の名前。その池の近くの城壁、エルサレムを囲む城壁に塔があり、その塔が倒れて十八人もの人々が下敷きになってなくなるという大事故があったようです。主イエスは、ピラトが起こしたガリラヤ人虐殺事件に続き、シロアムの塔倒壊事件を引き合いに出します。人々の記憶に新しい痛ましい事件。犠牲となる人がいる一方、助かる人もいる、誰も説明がつかないことです。それが人間を不安にします、なんとか合理的な説明をつけたがる、そして自分達とこのような災難は関係ないものだと確信したがる、そして「なくなった人は本人か祖先が罪を犯したので神から滅ぼされたのだ」という因果応報の理論を考え出します。自分たちの安心のためならば、特定の人々を不当に貶め悲しめることでも構わない、まさに無知に恐れを注いで憎しみの炎が燃え出すのです。それは、災難や災害だけではありません。ヨハネ福音書には、生まれつき目が見えない男性に対する、弟子たちと主イエスのやり取りが記されています。弟子達は主に尋ねます。「**ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、誰が罪を犯したからですか。本人ですか、それとも、両親ですか。**」生まれつきの障碍をも罪の結果と考えようとするのです。東日本大震災の時にも「あの大災害は天罰だ」という人もいたし、今回のコロナウイルスについても、クリスチャンはじめ少数民族を弾圧している中国に対する「神の裁きだ」という人もいます。でも、そう言う人は、外部の人間、内側からの言葉ではありません。「自分達は違う」と安心したいからです。これは日本人だけでなく、ヨーロッパ人でもアメリカ人でも中国人にもある、全ての人々が持つ傾向だと思います。そう、私たちは考えたがるのです、「自分達はあの人たちとは違う」と。

5　人と神の違い

しかし、カール・バルトという神学者が次のような事を言っています。「人間は“自分たちは他の人々とは違う”と言い、それぞれの共通点を持った者同士で集まりたがる。“自分達は他とは違う”人間が作った共同体全てが主張している。人はあらゆることで、自分たちと他者を区別したがる、人種、民族、文化、宗教、生活習慣、出身校、職業、収入、etc,etc。しかし、キリストは違う。自分と他者を区別される事はない、あなたも私もおなじだ…として手を差し伸べる。そこが決定的に違う」本当にそうだと思います。私たち人間は、被造物です。創造主ではありません。そうではないのに、その被造物同士で細かな違いを言い立てます、「あの人達と私達は違う」と思いたがり、似たような者どうしで群れを造り、他の人々との間に壁を作りたがるのです。

キリスト・イエスは違います。最も、「自分はあなたたちとは本質的に異なる」と言えるお方、私たちと根本的に異なるお方にも拘らず、私たち人間と同じようになってくださったのです。私たちと同じになってくださった…主イエスのご生涯に渡ってそうでした。神と等しい方、神の身分にあった方が、私たちと同じ弱い肉体をとってくださった、そして罪を犯さない以外は全く私たちと同じになってくださいました。そして、私たちが受けるべき滅びを受けてくださいました。私たちは人間以上の者になりたがる、しかし主は最後まで人間に留まり続けてくださいました。そうして、神と人との隔ての壁を取り壊し、私たちにはっきりと父なる神を示してくださったのです。

私たち人間と主イエスは異なります、人と人とを分け隔てするか、しないかという点で決定的に異なります。だから、先ほどの目が見えない人について、「**ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、誰が罪を犯したからですか。本人ですか、それとも、両親ですか。**」と尋ねる弟子達に主は次のように答えます。「**本人が、両親が罪を犯したからではない。神の業がこの人に現れるためである**」そしてこの目が見えない方の目を開かれました。無知と恐れに振り回されて他者を差別したがる私たちの上に、神のみ業が現れる、それがキリスト・イエスそのお方です。

6　みな罪人

それは今日の聖書テキストにもよく現れています。災難にあう人々は、その人々の罪ゆえではないか？そう考えてしまう私たちに対して、主イエスは仰います。「[3] **決してそうではない。言っておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。**」同じ言葉を3節と5節、繰り返して言われています。「**決してそうではない。言っておくが、あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びる。**」

「悔い改めねば滅びる」とは、脅しのようにも聞こえます。しかし、主イエスは脅しておられるのではない、真実を仰っているのです。「悔い改める」という単語には、「方向転換」という意味があります。それまで人間や富、名誉の方、神ならぬものの方向に向いていた自分の体の方向をくるりと換えること、神の方に向き直ること。それが悔い改めです。神の方を向かず、神ならぬ方向を見ていれば、お互いに差別しあい私たちは滅びるしかないのです。肉体の命がなくなれば滅びる、物体となって塵に帰るのみで、跡形もなくなくなってしまう。これは科学が発達した現代では、みんなが知っていることです。

しかし、神の方に向き直れば、神を神として歩めば、私たちは滅びない！と主イエスは仰っています。滅びの淵を歩む私たちにとっての福音です、善き知らせです。「私はあいつらと違って罪深くない。あいつらは罪深い奴らで滅びて当然だ」と、人間同士区別しあい、差別しあう私たちに主イエスは呼びか

けるのです。「そうではない、神のみ前にいなければ滅びるという点でみな同じ。神のみ前ではみな同じなんだ、そして、悔い改めれば滅びないという点でも同じだ。どうか神の方を向き直り、神を神として生きて滅びから免れなさい、永遠の命への道を歩みなさい」と招かれています。

7　無花果の木の譬え

主イエスのみ声は、無花果の木の譬えの中にも大きく響いています。譬えじたいは簡単で、説明することもないでしょう。ぶどう園と無花果の木の持ち主が、天地万物の造り主である神。そして無花果の木が私たち。園丁が主イエスだと言われています。譬えの中で、地主である父なる神は、三年間実がなるのを待ったとされていますが、この三年間は、主イエスが地上で伝道された年月を示すとも言われています。神の御子が地上に降りてこられ人間となって伝道された、様々な奇跡を行われ、神の国が来つつあることを実際に示し、悔い改めて神の国に生きよ！と呼びかけられた。人々は、派手な奇跡は喜んだが、自分達の罪を指摘して悔い改めに生きることを勧める主の言葉は無視した、自分たちに都合のよい言葉しか聞こうとしなかった、神の目には良い行いをせず、自分たちを神として歩むことをやめなかった。だから、父なる神は、「実をつけない無花果なら、切り倒してしまえ。別の実をつける良い木を植えよう」と告げるのです。父なる神は、この農場主は、無花果の木を愛していました。だから、三年間も待ちました。「三」というのは聖書では完全数。完全に完璧に待った、これ以上、待つ必要もないほどに待った…とも言えます。もう待っても無駄だと断言できるほどに待ったというのです。それは先ほど共に読み交わしたイザヤ書5章の「ぶどう畑の歌」にうたわれる神の悲しみでもあります。

しかし、園丁なるイエスさまは、そのような神さまに必死にとりなします。園丁にとって、この無花果の木はかけがえのない木、この木が切り倒されるのは自分の身が切られることのように辛い。だから、「もう一年だけ待ってください。木の周りを掘って肥料をやりますから」と掛け合います。古代世界では、現代世界では考えられない位、主人と使用人の違いは大きいもの、主人に逆らうのは命懸けです。園丁である主イエスは、ご自身の命をかけて、農場主である父なる神に意見しています。この園丁は自分の命をかけて無花果の木を愛しています。このように言えるのは、神の御子お一人です。園丁は「肥やしをやる」とあります、主イエスご自身の命、十字架の上に割かれた体、流された血でした。

そして、私たちは主イエスにとって、命をかけて愛されている無花果であるという点で、全く同じなのです。私たちは確かに様々に違い、一人として同じ人間はいません。しかし、そんな私たちでもただ一つ同じことがある。それは、

神の御子イエス・キリストの十字架によって贖われた者であるという事。この共通点以上に、神のみ前に重大な事はありません。私たちは、主イエス・キリストにあってみな同じ。神の御子が命を投げ出してくださった、だから私たちの命は、神にとって、私たちにとって無条件に尊いのです。

8　コロナウィルス騒動で学ぶこと

冒頭でお話したブレディみかこさんの記事に戻ります。彼女は次のように続けます。「『学校にコロナを広めるな』と息子に言った同級生の少年は、その後、息子に謝りに来た。階段で起きたことを見ていた誰かが彼に注意したそうで、『さっきはひどいことを言ってごめん』と申し訳なさそうに謝ったというのだ。『僕は黙って立っていただけだったけど、誰かが彼にきちんと話をしてくれたから、彼は自分が言ったことのひどさがわかったんだよね。謝られた時、あの場で何も言わなかった僕にも偏見があったと気づいた』と息子が言った。『偏見？』『その子、自閉症なんだ。だから、彼に話してもわかってもらえないだろうと心のどこかで決め付けて、僕は黙っていたんじゃないかと思う』」

私たちは、あの人たちは自分たちとは違うと思い、分かり合おうとせずに、自分たちを囲い込む壁を高く高く塗り固めていきます。自分たちだけが正しくいられる場所を作ろうとする。しかし、その壁は主イエスが2000年前に、ご自身の十字架によって壊してくださった壁です。無意味にしてくださった壁です。自閉症の子どもの言葉を「よくない事だ」と率直に注意し、壁を突き崩した子がおり、自閉症の子もブレディさんの息子さんもその後に続いた。まさにこの子供たちの生き方こそ、十字架と復活の主イエスにある生き方だと思います。

更にプレディさんの記事を引用します。「きっとこういう日常の光景がいま世界中で展開されている。部数を伸ばしたいメディアや勢力を拡大したい政治勢力が大文字の『恐れ』を煽（あお）る一方で、人々は日常の中でむき出しの差別や偏見にぶつかり、自分の中にもそれがあることに気づき、これまで見えなかったものが見えるようになる。知らないことに直面した時、人は間違う。だが、間違いに気づく時には、「無知」が少し減っている。新型コロナウイルスは閉ざされた社会の正当性を証明するものではない。開かれた社会で他者と共存するために我々を成長させる機会なのだ。」

その通りだと思います。しかし、コロナウィルスによる混乱がますますひどくなり経済的に破綻し、生き残ることが難しくなった時、このブレディさんのような姿勢を持ち続けることは、人間の力だけでは難しくなるでしょう。私たち人間はそのままではやはり自己中心的なものですから。混乱した状況になればなるほど、平穏な日常では見えないこと、ものの本質が見えてきます。危機の時ほど、人間の自己中心的なあり方、その罪がよく見えてきます。しかし、だからこそ、危機の時ほど、主イエス・キリストにある生き方の大切さも見えてきます。

危機の時ほど、キリストがさやかに見え、そして彼から学ぶチャンスでもあるのです。自分を神として生きてきた罪を悔い改め、なすべきことを示して頂くチャンスです。世界は先行き不透明、コロナウィルス終息はいつになるかわかりません。しかし、主イエスは私たちにおっしゃいます。「**恐るな。私はあなた方と共にいる**。」たとえ体で離れていても、主イエスの十字架と復活によって私たちはつながっています。恐れが蔓延する中で、私たちは他者の恐れの中に自分を見出し、主イエスによって贖われた者のあり方を見出し、神のみ前に成長することができます。この試練の中、さやかに姿を現す主イエス・キリストに倣い、一回りも二まわりも霊的に成長させていただきたい、そのように祈り願っています。